(E)ISSN:2181-1784
www.oriens.uz
3(20), March, 2023

ブラジル・ポルトガル語俳句の中のモデルニスタ詩人の痕跡
—ギリェルミ・ヂ・アウメイダの作風と影響—
TRACES OF THE MODERNIST POET IN THE BRAZILIAN PORTUGUESE HAIKAI: STYLE AND INFLUENCES OF GUILHERME DE ALMEIDA

https://doi.org/10.5281/zenodo.8094470

スエナガ エウニセ　SUENAGA Eunice
博士　愛知県立大学　准教授

ABSTRACT

This presentation aims to analyze the unique haiku (haikai) style of a Brazilian poet named Guilherme de Almeida (1890-1969), one of the organizers of the Modern Art Week in São Paulo in 1922, who created his own style of haikai in the first half of the twentieth century. Despite not being the first to introduce the haiku to Brazil, nor the one who first wrote the haiku in Portuguese, he is the most famous one, and consequently contributed enormously for the spreading of this poetry form in the country. In his article titled "My haikais" published in 1937, Almeida showed his great appreciation for the haiku and made efforts to demonstrate why this Japanese verselet can be imported to the Portuguese language literature. He argued that there are several similarities between the Japanese verselet and Portuguese poetry and established strict rules for his haikai writings: a tercet composed of 575 syllables, along with title and rhymes. His proposed rules were followed by many poets, however the concept that the authentic haiku does not have title nor rhyme is progressively becoming widely known after the formation of the group called Grêmio Haikai Ipê in 1987. Thus almost nobody follows Almeida's rules nowadays. Nonetheless, his efforts to spread haikai in Brazil are widely recognized as highly influential together with other poets who followed him, for instance Haroldo de Campos, Millôr Fernandes, Paulo Leminski and many more.

Keywords: *International Haiku, Brazilian Portuguese Haikai, Guilherme de Almeida.*

はじめに

ギリェルミ・ヂ・アウメイダ（1890-1969）は 20 世紀前半にブラジルでもっとも人気を博した詩人の一人である。ブラジルでモデルニスモ運動の幕開けとなった 1922 年の近代芸術週間に参加し、1930 年にはブラジル文学アカデミーのメンバーに選ばれ、1959 年には人気投票で「プリンス詩人」に選ばれたアウメイダは、日本の俳句を 20 世紀前半にブラジルで紹介した詩人としても知られている。

アウメイダは日本の俳句をブラジルで最初に紹介した人ではないし、ポルトガル語で俳句をつくった最初の人でもない（増田, 1986）。しかし、もっとも有名な人物であったことは疑いないので、ブラジルでの俳句の普及への貢献は大きい。アウメイダはまた俳句の独特のルールを提唱し、それは長いあいだブラジルの詩人たちによって踏襲されてきた。

本発表では、アウメイダがどのような理論や技巧を用いて、韻やタイトルなど西欧の詩の要素をもたない日本の俳句を、詩のカテゴリーにおさめようとしたのかを考察し、後世詩人への影響についても言及する。

1. ブラジルにおける俳句活動

アウメイダの俳句を紹介する前に、ブラジルにおける俳句の流れを簡単に紹介する。

ブラジルには 1908 年に開始された日本人移民によって持ち込まれ、日本人移民や日系人のあいだで継承されてきた日本語俳句（本発表で「ハイク」と呼ぶ）と、ヨーロッパやアメリカ経由で俳句を知ったブラジルの知識人たちにつくられてきたポルトガル語俳句（本発表では「ハイカイ」と呼ぶ）が独自に発展してきた。前者はホトトギス派の流れをくみ、結社をつくり、季語を重視し、また日本の句会の形式を踏襲する句会活動を行う（細川, 2012）。その中心的な役割を担ったのが、ブラジルへ出発する際、高浜虚子から「畑打って俳諧国を拓くべし」とのはなむけの句をもらった弟子の佐藤念腹である（蒲原, 2020）。後者の流れでは、日本人移民の俳句活動とは関係なく、フランス語訳や英訳によって俳句を知った知識人たちが独自の形式や解釈で「haicai」もしくは「haikai」と称する短詩（多くの場合三行詩）をつくり、その結果ハイカイは多くの人の知るところとなり、独自の発展を遂げてきた（久冨木原, 2020）。後者の流れでは、本発表で扱うギリェルミ・ヂ・アウメイダのほか、アロウド・デ・カンポス、ミロール・フェルナンデスやパウロ・レミンスキーなど、節目ごとに影響力のある知識人たちが日本の俳句の簡潔性、技巧性や禅に通じる精神性など、異なる要素に意義や価値を見出し、紹介したことで、俳句の認知度をあげることに貢献してきたのである（スエナガ, 2018）。ブラジルでハイカイをつくる詩人は増えたが、タイトルがあったりなかったり、韻を踏んだり踏まなかったり、そして音節の数を 575 にしたりしなかったりと、その形式はばらばらであった。また季語への関心も薄かった。

このように独自に発展してきたブラジルの日本語ハイクとポルトガル語ハイカイであるが、1987 年になると、季語のある「正当」な俳句の基準に則るポルトガル語ハイカイを普及しようという動きがでてきて、グレミオ・ハイカイ・イペー（以下「グレミオ・イペー」）が設立された。グレミオ・イペーは、佐藤念腹の弟子の一人、増田恆河を中心にポルトガル語で活動を続け、ブラジルのハイカイスタたちに季語のある、韻を踏まない、タイトルをもたない「正当」な俳句を浸透させようと試みてきた（白石, 2021）。2008 年に増田が死去した後は、姪のテルコ・オダがグループの代表的な役割の担っている。

2. アウメイダのハイカイの独自のルール

1917 年に最初の詩集『Nós 私たち』を発表してから一躍人気詩人になり、1930 年にはブラジル文学界の最大の名誉であるブラジル文学アカデミー（ABL）の会員に選ばれたアウメイダは、20 世紀初頭にブラジルでもっとも影響力のある詩人の一人であった。初期には高踏派の影響が色濃い作品を多く発表したアウメイダが俳句に興味をもったきっかけは定かではないが、1922 年の近代芸術週間を主催した若い芸術家たちが創刊した『Klaxon』誌に日本の俳句が紹介されていたこと（Guttilla, 2009）、また 1930 年代にサンパウロ総領事を務め、俳人でもあった日本の外交官市毛孝三（俳号は暁雪）と交流があったことはよく知られている（スエナガ, 2022）。

アウメイダが俳句のポルトガル語訳を発表するのは、1936 年 7 月、『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙（以下『エスタード』紙）においてである。「Poesia japonesa 日本の詩」と題するエッセイで、芭蕉の句 2

句、そして子規の句 1 句をジョルジュ・ボノー『Anthologie de la poésie japonaise 日本詩歌選集』からの重訳で紹介している。そして同紙に 1937 年 2 月 28 日に掲載された「Os meus haikais 余の俳諧」と題するエッセイで、独自のハイカイ論及び自作のハイカイ 9 句を初めて発表するのである。ハイカイが詩集に収録されるのはその 10 年後、1947 年に刊行される詩集『Poesia vária 雑詩』で、「余の俳諧」で発表された 9 句を含む 43 句が収録されている。次にまとまったハイカイが発表されるのは 1951 年で、13 句が詩集『O Anjo de Sal 塩の天使』に収録されている。これら 2 冊に収録された 56 句のハイカイが、アウメイダの全ハイカイとして紹介されることが多い（Almeida, 1996）。

アウメイダは最初から厳しいルールをもつハイカイを提唱している。それはタイトルをもち、575 音節からなり、韻を踏む三行詩としてのハイカイである。そのハイカイ 1 句を紹介しよう。

Caridade Desfolha-se a rosa: parece até que floresce o chão cor-de-rosa.	憐愍 薔薇の花弁が落ちる 地が薔薇色の 花と咲くまで[1]

このように、アウメイダの句にはタイトルがあり、575 音節からなる 3 行で構成され、1 行目の最後の音節と 3 行目の最後の音節、そして 2 行目の第 2 音節と最後の音節が韻を踏む。

3. アウメイダのハイカイ論

東洋の詩への称賛からはじまる「Os meus haikais 余の俳諧」では、西欧の詩の要素をほとんどもたない俳句に詩の要素を付与しようとする努力、そして外国語への移植が難しいとされるものの、ポルトガル語の俳句は成立するということを証明しようとする苦心が読み取れる。そこで俳句は「もっともシンプルで的確なかたち」に凝縮された詩であると称えられ、次のように定義されている。

> 俳諧は、もっともシンプルな表現に縮められた詩である。ひとつの表明である。論理的であるが、説明がつかない。移り行く季節の静かな飛翔の間に捉えられた純粋な感情―まるで春の花を摘むように、夏の太陽の光を捉えるように、秋の枯葉を拾うように、そして雪の断片をつかむようなーである。繊細な総論（シンテーゼ）に凝縮された感動。それが 17 音で、三行で詩的に表現される。[2]

[1] 『ホトトギス』第四十巻第十一号（1937 年 8 月）に掲載された市毛暁雪抄訳ギリェルミ・ヂ・アウメイダ著「余の俳諧」からの引用。

[2] 日本語訳は、断りのない限り、引用者による。以下同様。

アウメイダはまた、自分は 20 年間詩を書いてきて数十冊の詩集を発表したが、いま思えば、邪魔な装飾品や不純物を取り除けば、最終的に俳諧の 17 音節で表現できない詩はないという静かな結論に達した、という。そして俳句を外国語でつくることはできないという意見があるが、自分はそうは思わないと述べ、日本の俳句とポルトガル語の詩歌との 3 つの共通点をあげる。まず日本の詩歌もポルトガルの詩歌も音節を数える、次に、日本語とポルトガル語はア、エ、イ、オ、ウの母音が共通している、そして 3 つ目に、ポルトガル語にも 5 音節と 7 音節の詩歌が多いという共通項があるという。

音節については、日本の俳句は文字数を数えるので、厳密には音節を数えるのではない。なお、アウメイダの音節の数え方はポルトガル語の伝統的な詩の音節の数え方を踏襲し、それは音声学的な音節とは異なる（スエナガ, 2023）。母音の数が同じだということについては、厳密にいえばポルトガル語には鼻母音があるので、日本語とまったく同じではない。3 つ目の共通点の、ポルトガル語の伝統的な詩や諺などは 5 音節もしくは 7 音節であることが多いという点については、アウメイダは伝統的な詩や諺などは 5 音節もしくは 7 音節のことが多いということを例を数多くあげて証明を試みる。

このように、アウメイダは、日本の俳句とポルトガル語の詩歌などとの共通点をあげ、575 の俳句の形式はポルトガル語圏の人々にとってなじみのあるものなので、ポルトガル語でも俳句をつくることが可能であると持論を述べ、最後に、自分は俳句に韻を導入するのだという。結果、十四行詩などポルトガル語の伝統的な詩の形式に則る厳密な音節の規則、韻やタイトルをもつアウメイダ流のハイカイが誕生したのである[3]。つまるところ、アウメイダは詩の要素をほとんどもたない日本の俳句をポルトガル語のハイカイ（詩）として移植するにあたり、西欧の詩の要素であるタイトル、厳しい音節のルール、そして韻から解放することはできなかったのである。

4. 後世への影響

ヴァウドミロ・シケイラ・ジュニオルはアウメイダのルールを踏襲し、タイトルをもち、575 音節の 3 行からなり、韻を踏む句をつくっている。

FAZENDA	農園
Três grandes paineiras.	大きなパイネイラ[5]3 本
Antigas. Irmãs. Amigas.	古い. 姉妹. 友だち.
Lindas companheiras. [4]	美しい仲間.

[3] ブラジルのハイカイ研究の第一人者、パウロ・フランケッティ氏はアウメイダのハイカイについて、韻や厳しい音節のルールは興味深いハイカイの創作の妨げにならなかったが、タイトルをつけたことで、本来の俳句から離れ、感傷的になりすぎたと批判する。
[4] GUTTILLA, Rodolfo Witzig (org.). (2009). *Boa companhia Haicai*. São Paulo: Companhia das Letras. p. 179.
[5] トックリキワタ。アオイ目アオイ科の落葉高木。

自ら「Hai-Kais」と呼ぶ風刺に富んだ三行詩をつくり人気を博したミロール・フェルナンデスは、タイトルをつけたり、つけなかったり、音節の数は考慮しない自由な句をつくったが、アウメイダの韻のルールに部分的に従い、1 行目と 3 行目が韻を踏む。

POEMA EFEMÉRICO	はかなさの詩
Viva o Brasil	ブラジルばんざい
Onde o ano inteiro	ここでは一年中
É primeiro de abril[6]	エイプリルフール[4月1日]

1987 年に季語のある「正当」なポルトガル語ハイカイをブラジルでもつくろうと活動をはじめたグレミオ・イペーは、タイトルや韻は不要だという立場だが、575 音節の三行詩という形式は踏襲し、音節の数え方はアウメイダの数え方、つまりポルトガル語の伝統的な詩の音節の数え方を大方踏襲する。以下に、増田恆河の後継者としてグレミオ・イペーの中心的な役割を担うテルコ・オダの句を 1 句紹介する。

Goiaba vermelha —	赤いグアバー
Moradia perfumada	白い虫たちの
de bichinhos brancos.[7]	香り立つすみか

グレミオ・イペーの設立以降、俳句にタイトルや韻は不要だという考えが浸透してからはアウメイダのルールに厳密に従うハイカイスタはほとんどいなくなった。しかし、ブラジルでもっとも多くつくられている詩はハイカイである（Calcanhotto, 2014）といわれるほど俳句が普及したいま、アウメイダの果たした役割は決して小さくはないだろう[8]。

[6] GUTTILLA, Rodolfo Witzig (org.). (2009). *Boa companhia Haicai*. São Paulo: Companhia das Letras. p. 139
[7] ODA, Teruko (2015). *Waga furusato no uta Canção da terra natal*. São Paulo: Escrituras Editora. p. 91.
[8]発表者が調査のために 2022 年 8 月に共同研究者と訪れたブラジルのアマゾナス州で、アマゾナス連邦大学の内ケ崎留知亜准教授及びカスィオ・フェレイラ教授から、ハイカイはブラジルの学校のポルトガル語の教科書で扱われているとの情報を得、資料提供を受けた。驚いたことに、基礎教育 8 年生（日本の中学 2 年に相当）の教科書で、ハイカイが 25 ページにもわたり紹介されていた（PEREIRA, Thais Helena Miguel; MARINHO, Georgia Fabiana Mendes (org.). (2022). *8º ano Ensino Fundamental Livro 1 Língua Portuguesa*. Fortaleza: Companhia Brasileira de Educação e Sistemas de Ensino. pp. 42-67.）。そこではまず俳句や芭蕉の句の説明からはじまり、アウメイダを含むブラジルのハイカイ作者やその句が紹介されている。アウメイダ紹介のページではアウメイダの句の他、定型詩についての説明があり、16 世紀に活躍したポルトガルの詩人カモンイスの十四行詩が紹介されている。詩やハイカイについて一通り学び分析の課題などを行ったあと、最後に風景や自然

参考文献 (REFERENCES)

1. 蒲原宏『畑打って俳諧国を拓くべし—佐藤念腹評伝—』大創パブリッシング 2020 年
2. 久冨木原玲「日本の俳諧・俳句からブラジルのハイカイへ－日本文化の特異性と新展開」『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』第 6 号 2020 年 3 月
3. 白石佳和「『自然諷詠』と KIGOLOGIA をめぐって－日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割」『Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: Integralização e Convergência』Pontes Editores 2021 年
4. スエナガエウニセ「ブラジルのハイクとハイカイ、そしてハイカイ集『百枚の花びらの菊』について－翻訳・模倣・オリジナリティー」『物語研究』第 18 号 2018 年 3 月
5. スエナガエウニセ「ギリェルミ・ヂ・アウメイダに関する覚書—1937 年のハイカイ論「Meus haikais 余の俳諧」発表の前後を探る－」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第 23 号（日本文化専攻編　第 13 号）2022 年 3 月
6. スエナガエウニセ「ギリェルミ・ヂ・アウメイダのハイカイ及びその考察」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第 24 号（日本文化専攻編　第 14 号）2023 年 3 月刊行予定
7. 細川周平「俳句—結社組織の移植」『日系ブラジル移民文学 1－ 日本語の長い旅[歴史]』みすず書房 2012 年
8. 増田秀一「ブラジルのハイカイ」『俳句文学館紀要』第 4 号 1986 年 7 月

9. ALMEIDA, Guilherme de. (1996). *Haicais Completos*. Aliança Cultural Brasil-Japão. São Paulo: Escrituras Editora.
10. CALCANHOTTO, Adriana (org.). (2014). *Haicai do Brasil*. Rio de Janeiro: Edições de Janeiro.
11. FRANCHETTI, Paulo (1996). Guilherme de Almeida e a história do haicai no Brasil. In: ALMEIDA, Guilherme de. *Haicais Completos*. Aliança Cultural Brasil-Japão. São Paulo: Escrituras Editora.
12. GUTTILLA, Rodolfo Witzig (2009). Haicai, haicais (ou como o mais importante poema japonês foi abrasileirado). In: GUTTILLA, Rodolfo Witzig (org.). *Boa companhia Haicai*. São Paulo: Companhia das Letras. pp. 7-22.
13. 本発表は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）課題番号 21H00520 の交付を受けて行った研究成果の一部である。

などの写真を撮り、それをもとに実際にハイカイ（1 行目と 3 行目が韻を踏む三行詩。音節については言及なし）をつくってみようという課題があった。つまり教科書でハイカイは詩を学ぶ題材として用いられているのである。